

クルーズ客船「飛鳥II」船医

関 賢一 君

【せき けんいち】

1944年長野県生まれ。小学校3年から横浜で育つ。1968年医学部卒業（47回生）。専門は産婦人科。群馬県の総合太田病院（現太田記念病院）、神奈川県警友病院（現けいゆう病院）、慶應義塾大学病院を経て、テキサス大学サンアントニオ校に留学。その後、国立霞ヶ浦病院（現独立行政法人国立病院機構霞ヶ浦医療センター）、1980年からは川崎市立川崎病院に勤務し、産婦人科部長などを経て副院長で定年退職。2009年から飛鳥IIの船医を務めている。医学博士。



海と港と船が大好きな横浜育ちのお医者さんが、 定年後に選んだのは、 クルーズ客船「飛鳥II」の船医

飛鳥IIは一つの街。
船医はその街のお医者さん

——100日を超える世界一周クルーズなど世界の大海原の航海から、日本近海の数日の優雅なクルーズまで、多彩なコースがある憧れの豪華客船「飛鳥II」。1968年に医学部を卒業した関賢一さんは、市立川崎病院を定年で退いた後、2009年から同船の船医を務めています。クルージングは、乗船客にとって、日々の忙しさから離れ、ゆったりとした時間に身をゆだねて過ごす極上の楽しみ。そんな乗船客とクルーの健康を守っている、船医について教えてください。

関 飛鳥IIは全長241メートル、全幅29・6メートル、総トン数約5万トン、12階のデッキを有する日本最大のクルーズ客船です。収容乗客数は872名でクルーは約470名、合計1300名以上の人が一緒に暮らすのですから、これはちょっとした街です。船医はその街のお医者さんというわけです。

大型船といっても、揺れは感じますから船酔いもします。また船の環境に慣れるまでの緊張で体調を崩す人もいます。とくに長期クルーズは仕事をリタイアした高齢の方も多く、ふとしたことでねん

ざや骨折をする方もいますし、薬剤を持参する方、点滴を定期的に必要とする方などさまざまです。船医は専門分野に限らず、あらゆる病気やけがに、的確に対応することが求められます。

短期クルーズは医師1名、看護師2名、長期では医師2名、看護師3名が乗船します。診療室で診療を行うほか、客室への往診もします。いざとなったら緊急搬送するケースもないとは言えず、その対応も重要な仕事です。

——乗客数もさることながら、クルーが500名近く乗っているのですね。

関 操船スタッフはもちろんですが、客室、レストラン、エンターテイメントなどの施設で、数多くのスタッフが働いています。ちなみに私たち医師や看護師が乗っているのは、本来これらスタッフのためです。陸の上でもよくある、大きな企業の会社内診療施設というわけです。ですから、スタッフの定期的な健康管理も重要な仕事です。

また、乗客への診療はすべて有料（自由診療）で、日本の社会保険や健康保険は適用されません。旅行保険に入ることをお勧めします。とくに長期クルーズでは必須です。

——1年間の乗務日数は？

関 年間でみると、ざっと8カ月乗船して4カ月が休みです。もちろん8カ月間乗りっぱなしではありません。2012年の世界一周クルーズでは、横浜からアジア、アフリカ、南米を回り、パナマ運河を通過、サンフランシスコまで約5カ月乗り、あとの乗船は1カ月と2カ月の勤務でした。ずいぶん休みが多いと感じるかもしれませんが、乗船中は土日祝の休日はありません。常に船内用PHSを携帯していて、24時間いつでも呼び出されても対応できるようにしています。

船医になる前に、「楽な仕事だなあ、うらやましいなあ」などと言われ、自分も少しその気になっていたのですが（笑）、皆さんが想像するほど楽ではありません。



診療に加え、日々の処置のレポート提出もありますし、けっこう会議もあるのです。制服の肩に4本の線があるのが、船長、副船長、機関長、ホテルマネージャーの4名。私の肩の線は3本半でその次の地位の役職で、週1回船内のマネジメントが集まる会議へも出席します。

——1日のスケジュールは？

関 午前6時に起床し、持参したビデオを見ながらラジオ体操、朝食後にデッキ（1周440メートル）を3周ウォーキングをして、8時半から2時間の診療の後、デスクワークなどをして昼食をとります。食休みとして15分ほど自室で昼寝をして、またデッキ5周のウォーキング。長い航海では、規則的な運動が健康維持の秘訣です。午後の診療時間は3〜5時間ですが、クルーは仕事の関係で時間外に来ることが多く、実際はもっと遅くまで開けています。その後は自由時間です。夕食を食べて、劇場でショーを楽しんだり映画を見たり、読書や医療の勉強をするのもこの時間です。ただしPHSを持ちながらです。バスルームでも常に手元に置いていきます。

——乗船客とのふれあいもありますか？

関 「アスカデイリー」という日刊の船内新聞で、船医として紹介されますから、

皆さん医者だとわかってきてくれているようです。経歴に義塾出身とあるので、それを目にした塾員の方から声をかけられ、お茶や食事をしながら義塾の話題で盛り上がることもあります。

医学部馬術部のほかに 三田のクラブにも所属

——船上生活を少し楽しみながらも船医としては、24時間気が抜けませんね。ところで塾員の話が出たところで、義塾時代の思い出を聞かせてください。

関 都内の私立高校から医学部に入学しました。当時の医学部はほとんど出欠をとらないので、かなり自由に過ごしていました。クラブは医学部三四会馬術部。当時は日吉キャンパスの馬場ではなく、世田谷区の馬事公苑近くの清風会という乗馬クラブで練習していました。早朝から練習を始めるのですが、馬の世話など



で、午前中の授業にはなかなか間に合いませんでした。もうひとつ、三田のユースホステルクラブにも所属したので、勉強とクラブ活動で忙しい充実した日々で

した。ユースホステルクラブでは医学部以外の友人がたくさんでき、今も交流が続いています。在学中は、このクラブの仲間と早慶戦観戦にもよく出かけました。今でも応援歌を歌えますよ。

卒業して3年目でしたか、後輩たちがユースホステル泊の1カ月のヨーロッパ旅行を企画して、「添乗ドクターとして参加してください」と頼まれました。理解ある上司のおかげで許可をとることができ、ギリシャやドイツなどを旅したのも、今は懐かしい思い出です。

——1968年3月卒業ですが、1967年の医学部創立50周年は記憶にありますか。
関 50周年の記憶はありませんが、ちょうどインターン制度廃止を訴える学生運動が盛り上がった時期で、何回かデモに参加しました。抗議の意味で、全国の医学部卒業生の8割強が、67年3月の医師国家試験を受験がボイコットし、翌68年3月の試験も、卒業生の約6割がボイコットしました。そのため、私を含め同級生の多くは卒業後の68年10月の国家試験を受けたので、医師免許証は12月交付になっています。

——70年安保闘争の前夜ですから、義塾でもそんなこともあったのですね。アメリカ留学の話も聞かせてください。



留学先で（前列中央）

関 卒業後は、慶應義塾大病院の産婦人科医局の所属になりました。1年間のフレッシュマン研修の後、出張先の群馬県太田市と横浜市の病院で1年ずつ研修をしてから、大学病院の医局に戻って3年間研究室で勉強して医学博士の学位を取得しました。その後、テキサス大学サンアントニオ校に2年間留学し、ポストドクトラルフェローの立場で、給料ももらいながらホルモンや不妊などの研究をしました。サンアントニオ校では世界的に増加し続ける人口を制御するための研究が盛んで、先進国だけでなく、タイ、チリ、ブラジル、エジプトなど発展途上国の若い研究者と交流することができ、医療のこのみならず視野が広がったと思います。

驚いたのは、財団からの多額の寄付で、日本と桁違いの研究費が使えたことです。日本では中古の研究機器もなかなか買ってもらえなかったのですが、申請すると

最新機器をすぐに買ってもらえるのです。キャンパス内で石油も出れば、ガラガラ蛇も出没するというテキサスらしい環境

で、アメリカの豊かさを実感した留学でした。車はもちろん必需品。中古車を買って、もともと旅好きですから通勤だけでなく、週末に泊まりがけのドライブをしたりフロリダまで1700キロメートル以上の距離を1週間かけて走って学会に参加したりしました。帰国時には1カ月をかけてレンタカーでイエローストーンからサンフランシスコまで、妻と幼い息子と一緒に、モーターで自炊しながらアメリカの自動車旅行も楽しみました。

——帰国後は市立川崎病院ですね。

関 その前に茨城県土浦市の国立霞ヶ浦病院に2年勤務して、1980年から65歳の定年まで川崎病院です。川崎病院の産婦人科は、1963年から腹腔鏡手術を手がけるなど、腹腔鏡手術の日本における先駆的な存在です。私も川崎病院ではずいぶんと腹腔鏡手術に携わるようになりました。今では腹腔鏡手術は広く外科でも行われていますし、おなかの中を

映すCCDカメラなどの機器も発達しました。これからますます広まる手術方法だと思えますので、その発展段階に立ち会えたのは幸いです。

——川崎病院を副院長で定年退職した後、飛鳥Ⅱの船医になるわけですが、もともと船医を希望していたのですか。

関 勤務医の定年後の生き方はさまざまですが、私の場合は、ずいぶん前から「定年後は船に乗ろう」と思っていました。若い頃には、当時ベストセラーだった北杜夫の『どくとるマンボウ航海記』を楽しんで読みましたし、なんといつても横浜育ちで、海・港・船は三点セットで大好きでした。小学生の頃、よく船を見に港に行きましたし、桟橋に停泊している大きな船に手を振るとクルーが乗せてくれて、船内を案内してもらった懐かしい思い出もあります。

定年の数年前、知人に雑談で「船医もいいなあ」と話していたら、飛鳥Ⅱを運行する郵船クルーズの人を紹介してくれました。産婦人科医は手術もできるし、内科的なことも扱うので船医に向いていると思います。反面、男性のからだはほとんど診たことがありませんでした（笑）。そこで川崎病院での最後の1年は他の科を回って、日常の診療について学

びました。それがずいぶん役立っています。——では、最後に塾生へのメッセージをお願いします。

関 私は三田のユースホステルクラブでいい経験をしました。視野を広げるためには、他の学部の人と交流することがとても大切だと思いますし、それが総合大学の良さのひとつだと思います。なるべくいろいろな人と交流してたくさん友達をつくってほしいですね。

また、夢を持って、興味があることにどんどんチャレンジしてほしいと思います。私の船医も、定年後ではありますが、ある意味で、夢を温め続けたゆえのチャレンジだと思っています。

——本日はありがとうございました。

